Ⅳ　炭鉱離職者と関西の労働運動（1）

谷　合　佳代子

はじめに
1　戦後石炭政策と炭鉱離職者対策の概略
2　三池争議後の離職者の再就職
3　離職者と総評大阪地評
4　「三池魂」はいかに受け継がれたか
5　今後の研究課題

はじめに

本稿は、2017年に関西大学博物館とエル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）の共催により開催予定の「炭鉱の記憶と関西　三池炭鉱閉山20年展」（仮題）に向けた調査・研究の中間報告である。この展示会は本研究班の研究成果発表としても位置づけられている。

1960年の三池争議以後、1997年の閉山に至るまで、三池炭鉱からは大量の離職者が生まれ、家族ぐるみでの移住が行われた。そのうち、関西への移住はどのように行われたのか、移住後の元三池炭鉱労働組合員とその家族はどのように働き、三池のネットワークを保ち続けたのかを調査することが本稿の目的である[1)]。

1）三池労組は1960年の大争議の過程で二つに分裂したが、今回は第一組合の関係者からのインタビューしか実施できなかったうえに、京都市在住者１名、大阪府高槻市在住者（故人）の関係者、京都市在住者（故人）の遺族、の３例しか収集できていない。また、今回は総評大阪地評への転職をテーマに記述したため、結局１例の報告にとどまる。

三池以外の炭鉱については離職者のネットワークや生活についての調査が進んでいるが、三池炭鉱から関西へ転出した離職者についての研究は戸木田嘉久著『九州炭鉱労働調査集成』所収の「関西地方在住の炭鉱離職者の就労と生活実態調査（1970年12月-72年２月）」およびその初出論文「関西地方在住の炭鉱離職者の就労と生活状態に関する調査報告」[2] 以外に見当たらない[3]。

戸木田たちの、大阪における炭鉱離職者の労働と生活の実態調査は大規模なものであり、非常に貴重ではあるが、その調査目的が「労働力流動化政策への批判」（p.250）であったというように、最初からある意図を持って行われていることに注意が必要である。もっといえば、炭労（日本炭鉱労働組合）の政策転換闘争を「構造改革派」の政治路線であるとして批判するという、イデオロギー論争、党派闘争ありきの調査研究である点を念頭において読むべきであろう。

とはいえ、本稿は戸木田批判を目的とはしていないので、これ以上ここでは立ち入らない。

研究書以外には、三池争議のその後を追った鎌田慧の『去るも地獄残るも地獄』（1982年）という優れたルポルタージュがあり、大阪へ移住した元組合活動家の暮らしぶりについても描かれている。本稿では、鎌田のドキュメンタリーにも依拠しつつ、三池二世からのインタビューを掲載し、三池闘争の経験と記憶が関西の労働運動の中でどのように根をはっていったのか、その事例を紹介

2）『立命館経済学』第19巻５号、20巻５・６合併号に川端久夫との共著で掲載された。同書への再録にあたって、初出論文の約２分の１に削減された（同書、p.249）。

3）炭鉱離職者のネットワークや生活に関する先行調査・研究については以下のものを参照した。

① 『移動社会と生活ネットワーク：元炭鉱労働者の生活史研究』高橋伸一編著　高菅出版，2002.3

② 『移動する家族の生活史：旧産炭地を事例として』永吉守［ほか］著　京都大学グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」，2010.2

③ 『炭砿労働者の閉山離職とキャリアの再形成：旧常磐炭砿K.K.砿員の縦断調査研究』正岡寛司［ほか］編　早稲田大学人間総合研究センター：早稲田大学文学部社会学研究室，1998-2007

石炭産業全般にわたる先行研究の紹介は島西智輝著『日本石炭産業の戦後史』（慶應義塾大学出版会、2011年）p.29以下に詳述されている。

する。

1　戦後石炭政策と炭鉱離職者対策の概略

日本の近代化・工業化を支えたエネルギーである石炭は、1940年の採炭量5630万トンを戦前のピークとし、戦後は大幅な減産となっていた。敗戦時の産出量はわずか２万2000トンである。戦後では、1961年の5540万トンを最高にその後は漸次減少している。炭鉱労働者数は、最大時の昭和20年代には45万人以上であった（下請人数は含まない）[4]。

戦後の石炭不足は発電所の稼動に影響を与え、敗戦直後はたびたび停電が起こっていた。このため、1946年12月には政府によって「傾斜生産方式」が発表され、鉄鋼と石炭に資材・資金と労働力を集中投下して産業復興が目指された。その結果、1947年度には3000万トン近い産出量まで復帰した。

戦時統制期を含め、傾斜生産方式の時期を経て1949年９月までは統制期にあたる。統制撤廃後には早くも1950年に「鉄鋼業及び石炭鉱業合理化３ヵ年計画」、54年には「石炭鉱業合理化基本計画」が通産省によって発表された。非効率炭鉱の閉山と大規模鉱山への生産集中策である「スクラップアンドビルド」とよばれる石炭鉱業合理化臨時措置法（1955年）の制定によって本格的に石炭政策が体系化され、以後、第９次石炭政策にいたるまで、石炭政策は度重なる改定を経て2002年まで続いた[5]。石炭産業は政策への依存度の高い産業の典型といえる。

石炭政策の中でも大きな位置を占めたのが離職者対策である。石炭から石油へのエネルギー構造の転換による炭鉱合理化と大量の失業者の発生に対して、1959年12月に「炭鉱離職者臨時措置法」が制定された。これは、石炭不況は単

4）一般財団法人石炭エネルギーセンターWebサイトより。2015.1.27最終確認。
http://www.jcoal.or.jp/coaldb/country/06/post_9.html
5）石炭政策の概略については島西前掲書を参照した。

なる一時的な景気変動に基づくものではないという認識から、抜本的な対策を講ずる必要にかられた政府が制定したものである。1958年ごろから筑豊炭田など中小の炭鉱から大量の失業が滞留し、社会問題化するなど、従来の失業対策ではすでに対処できないレベルに失業問題が悪化していることを反映している。

炭鉱離職者臨時措置法の内容は、①広域職業紹介、②職業訓練、③炭鉱離職者の優先雇用、④炭鉱離職者援護会の設置、などを柱としていた。これらは、炭鉱離職者を産炭地から他の工業地帯への分散移動を促進することを主眼として、移動資金の提供や職業訓練のための旅費などの手当てを盛り込んでいる。産業構造の転換を目指して大規模な予算措置が講じられたわけである。

また、産業界も独自に離職者対策を進め、系列子会社への転職斡旋を行った結果、1959年度において三井鉱山、三菱鉱業、住友石炭等で3000人の就職斡旋が行われた[6)]。

1961年には失業保険法に基づく福祉施設として「雇用促進事業団」が設置され、職業訓練所を設置することや移転就職者のための宿泊施設を設置することとなった。同事業団発足に伴い、炭鉱離職者援護会は解散する。この年の炭鉱離職者対策予算は40億円を超え、翌62年にはさらに増えて67億4600万円となった。

1962年からは「炭鉱離職者求職手帳」制度が始まり、手帳保持者に対して失業手当に該当する「就職促進手当」が支給された[7)]。この手帳は「黒手帳」と呼ばれ、通常の失業手当の受給期間終了後も延べ３年間の手当受給が可能であった。炭鉱閉山数と離職者数は1963年にピークを迎え、その数は１万8674人を数えた。

炭鉱離職者対策は1991年の石炭鉱業審議会答申を受けた第９次石炭政策によっておおきく方向転換し、「90年台を構造調整の最終段階と位置づけ」、将来の合理化に備えてあらかじめ石炭企業の経営多角化・新分野開拓を通じて雇用対策を講じることの重要性が謳われた。1992年に炭鉱離職者臨時措置法が抜本的

6）日本石炭鉱業経営者協議会編・発行『石炭労働年鑑』昭和35年度、1960年。征矢紀臣著『炭鉱労働者雇用対策の新展開』（労働新聞社、1993年）p.13-30。
7）『石炭労働年鑑』昭和37年度、昭和38年版。

に改正され、「炭鉱労働者等の雇用の安定等に関する臨時措置法」と名称も変わり、職業転換のための助成金を企業に対して発給する制度が新設された[8)]。

最後の商業炭鉱が閉山[9)]する2002年まで石炭政策は実施され、1955年以降の離職者数は20万人を超え、40年以上にわたって政府が投じた石炭政策予算は４兆円にのぼった[10)]。

2　三池争議後の離職者の再就職

三井鉱山三池鉱業所（いわゆる三池炭鉱）は福岡県大牟田市と熊本県荒尾市にまたがる地域に存在する、日本最大の出炭量を誇る炭鉱であった。1959年12月の労組員1278名の指名解雇に始まる１年近くに及ぶ三池争議は、「総資本対総労働」の闘いと呼ばれている。結果は労組の敗北に終わり、解雇を受け入れた。争議前の三池炭鉱従業員数は１万4805人、うち三池炭鉱労働組合員は１万1711人に上っていたが、1961年末には三池炭鉱労組の組合員は4834人に激減し、争議の途中で分裂した三池炭鉱新労働組合が多数派を占めるようになった[11)]。

激しい闘いが繰り広げられた三池争議をこれ以上の流血の惨事から救うべく、職権斡旋に乗り出した藤林中労委会長が1960年８月10日に提案した内容は、指名解雇を受け入れるという、労組に圧倒的に不利な内容であった。しかし闘争の限界を感じていた総評（日本労働組合総評議会）の太田薫議長と炭労の原茂委員長は斡旋案の受諾を決め、三池労組の説得に乗り出した。組合員とその家

8）前掲『炭鉱労働者雇用対策の新展開』pp.44-47。

9）現在も操業する炭鉱は北海道の太平洋炭鉱だけとなっているが、2011年の東京電力福島第一原子力発電所の事故を受けて火力発電が見直されるようになり、発電用の需要を見込んだ北海道の業者が37年ぶりに新規採炭を始めるという報道がなされた。早ければ2015年４月に出炭する（J-Cast ニュース 2015.1.27　http://www.j-cast.com/2015/01/27226362.html）。

10）嶋﨑尚子「石炭産業の収束過程における離職者支援」『日本労働研究雑誌』55巻12号，2013年12月。

11）平井陽一著『三池争議　戦後労働運動の分水嶺』（ミネルヴァ書房、2000年）、三池炭鉱労働組合編『みいけ20年資料篇』（労働旬報社、1968年）などを参照。

族3000人を前に説得する太田と原は、数時間におよぶ面罵とつるし上げに遭ったという。太田の『わが三池闘争記』（労働教育センター、1978年）によれば、野次と怒号に包まれて「もはや生きた心地はしなかった」が、太田は最後に「総評がみなさんのあとの生活の面倒はかならずみます」と約束してその場を収束させた（pp.133-134）。

その言葉通り、翌年から総評は三池労組の組合員をオルグとして雇用することになる。オルグはオルガナイザー（organizer）の略語であり、「組織者」を意味する。労組結成、組合員獲得のための勧誘・組織化を担う人のことである。総評のオルグ制度は1956年３月に中小企業労働者の組織化のために発足した[12)]。当時、総評の地方オルグに16名の欠員が出ていたため、これを三池争議で解雇された労組員で補充することとした[13)]。

また、三池労組も再就職斡旋のための努力を続け、「生活協同組合をつくり衣料品の販売にあたったり、養豚場の経営にのり出したりした。しかし組合の闘士たちにとっても慣れないことで、なかなか思うにはまかせなかった」[14)]。三池争議で解雇された1200人[15)]の再就職は総じて茨の道であった。「生産阻害者」のレッテルを貼られた左翼活動家であった彼らを雇いたがる会社は少なく、総評や地方評議会へオルグとして転職するか、労組の力の強い企業や公務員職場への就職以外にはなかなか厳しかったようだ。筆者が元三池労組委員長の中原一氏と芳川勝氏に行ったインタビューでも、「元労組幹部で面倒見のいい人がつてを頼って就職斡旋にあたった」との証言を得た[16)]。

いっぽう、政府と会社はどのように再就職斡旋をおこなったのであろうか。

12）オルグ制度の詳細は、日本労働組合総評議会編『オルグ』労働教育センター、1976年を参照されたい。

13）『総評第17回定期大会1961年各部報告書』総務 p.11。

14）『みいけ炭鉱労働組合史』（三池炭鉱労働組合、1999年）p.154。

15）『石炭労働年鑑』昭和36年版によれば、争議終結に伴う退職者数は９月９日付で1,162人、争議解決以前の離職者数は1959年４月から60年９月までに1,117人である（p.417）。

16）三池労組元組合長（1984年～91年在任）の中原一氏と最後の組合長・芳川勝氏へのインタビューによる。2014年９月10日、大牟田市内にて。

三池争議を終結に導いた中労委の斡旋案は、会社と政府に対して就職の斡旋などの離職者対策を求めていた。争議終結に先立つ1960年８月、総理府に「炭鉱離職者対策推進本部」が設置され、９月21日に「三井鉱山三池鉱業所の離職者対策について」を決定、その内容は就職対策の強化、官公庁への就職強化、自営業希望者の援護、海外移住の斡旋などの措置を推進するものであった。

三井鉱山は1959年10月に本店及び各事業所に臨時就職対策委員会を設置した。「委員会の事務局員は、離職者の求職相談に応じるとともに、三井系列各社をはじめ、当社の取引先、職業安定所など広く回って求人の開拓に務めた」。一般の退職者については「それほどスムーズにはいかなかった。しかし、委員会を改組した［昭和］36年２月までには、離職者およびその子弟3,553名の就職を決定することができた」[17)]。

筆者が中原氏と芳川氏に「会社が三池争議後に就職斡旋のための努力をしたということを社史に書いていますが」と質問したところ、中原氏は「いやいや、三池争議のときは会社は斡旋せんと。会社の就職斡旋なんてええかげんな話よ」、芳川氏も異口同音に「ないね。それは労働組合を通じて、と思いますよ」と、二人とも言下に否定された。

『石炭労働年鑑』昭和36年版によれば、争議による1960年９月９日付け退職者1162人の就職決定数は1961年６月10現在196人で、就職先は自県内40人、大阪39人、東京37人、愛知31人、ほか各地、となっている（p.417）。

3　離職者と総評大阪地評

上述のように、三池争議によって離職した労組員は総評のオルグとして再就職する者が何人もいた。では大阪ではどうであったか。

17）『男たちの世紀：三井鉱山の百年』（三井鉱山、1990年）pp.317-319。なお、職業紹介業務は職業安定法の定めにより、公共職業安定所を介して行わねばならないので、会社の斡旋も形式的には職安を通すことになる。

総評大阪地評（日本労働組合総評議会大阪地方評議会）は三池労組支援のために1961年の春闘以降は、就職斡旋の活動を行っていた。1961年２月25日には地評において「三池を守る会」と在阪離職者との懇談会が持たれ、３月22日には常任幹事会で三池離職者２名をオルグとして採用することを決定している[18)]。三池を守る会は、総評のよびかけによって「炭労三池を守る会」として全国各地に作られた団体である。1960年２月１日に京都青年学生会議によって結成されたのを嚆矢として各地の労組や市民により次々と結成され、1960年９月末には700を数えた[19)]。

総評大阪地評では1961年春に２名の三池労組員をオルグとして受け入れるだけではなく、その後書記局に３名を雇用し、つごう５名の三池出身者が地評に勤めることとなった。５名のうち、特に大阪地評において長らく勤めたのが宮崎良勝、西川米生、山本幸三郎の３名である[20)]。

鎌田の『去るも地獄残るも地獄』には総評のオルグとして大阪に着任し、その後退職してとある会社の労務担当者になった人物の話が掲載されているが[21)]、元大阪総評オルグ・伍賀偕子（ごか・ともこ）氏の証言によれば、大阪地評では該当する人物はいないので、総評中央本部でオルグ登録されて関西に派遣されていた人物かもしれない[22)]。

総評のオルグ制度は各地方評議会でオルグ（オルガナイザー）として登録された人数に応じて補助金が中央から交付されていた。1961年当時、大阪ではオルグの欠員が出ていたため、これを三池労組出身者で補填することとなった。

18）『総評大阪地評第13回定期大会　1960年度一般経過報告書』p.37、p.52

19）三池炭鉱労働組合機関紙『みいけ』611号、1960.2.14。法政大学大原社会問題研究所編『新版社会・労働運動大年表』労働旬報社、1995年。

20）元大阪総評オルグ伍賀偕子氏へのインタビューに拠る。2015年１月22日実施。

21）鎌田慧著『去るも地獄残るも地獄：ドキュメント』筑摩書房、1986年（ちくま文庫）pp.232-235。

22）『総評地方オルグ団名簿』（日本労働組合総評議会組織局、1962年）の大阪地評の欄には12名の名前がある。

4　「三池魂」はいかに受け継がれたか

三池争議の発端となった指名解雇者1278名の１人であった宮崎良勝氏（1927～2000年）は、争議が敗北に終わり、組合側が全員の解雇を受け入れた後、総評大阪地評に再就職した一人である。宮崎一家がどのように大阪へ移住し、どのようにその後の生活を送ったのか、2014年12月12日に遺族へのインタビューを行った。応じてくださったのは妻の律子さん（1926年生まれ）と次女正子さん（1958年生まれ）である。

インタビューには大阪地評で宮崎氏とともにオルグとして働いた伍賀偕子さん（1942年生まれ）に同席してもらい、後日補足のためのインタビューを行った。

【宮崎良勝略歴】

熊本県玉名郡（現・荒尾市）生まれ。1953年熊本県立荒尾高校卒。1947年三井鉱山株式会社に就職、1960年９月同社退職。「文工隊員」、中央委員として活動し、三池労働者として青春時代を過ごしたことが以降の原点となる。1961年３月総評大阪地評にオルグとして就職。1960年度は争議対策部所属、1961年度～87年７月総評を定年退職するまでの間、一貫して組織局、争議対策局に所属して未組織労働者の組織化、地域組織の整備、労働争議の指導を行った。担当地域としては北大阪、北摂、東南、河南、堺阪南などで、この間、組織部長、争議対策部長などを歴任した。1968年度にはオルグ団長として組織担当者の相互の連携や各府県の組織オルグとの活動の交流などで活躍した。北摂地区担当時代は、第二組合づくりの中で苦悩する全国一般大幸銘板労組の団結強化に深くかかわり、また日本で最初の労災職業病への地域共闘組織である「大阪北摂労災職業病対策会議」の結成とその発展に大きく寄与した。家族は1950年３月に結婚した妻と１男２女[23)]。

23）遺族へのインタビュー及び、事跡録プロジェクト委員会著『大阪社会運動顕彰塔顕彰者事跡録』（大阪社会運動協会、2011年）p.312より。

妻律子さんは９人きょうだいだったので、口減らしの意味もあって1941年４月にソウルの看護学校に入学したという。敗戦時はソウル（当時は京城）の医学専門学校を卒業して２年勤めていたが、敗戦時いち早くソウルを脱出して引き揚げ船に乗ることができたので、1945年９月９日には郷里の熊本に帰ってきた。その後、三井三池鉱業所病院（現・三井大牟田病院）通称「天領病院」の万田分院に看護婦として勤めていた。結婚してすぐの頃は四山にあった夫の社宅に居た。

以下、インタビューを掲載する。

谷合：三池争議の思い出は。

律子：指名解雇の通知が来てそれを返上しました。次女正子が生まれるころは弥生町の緑ヶ丘社宅に移っていたんです。

争議の最初は第二組合がなかったんですよ。そのころの家族構成は、長男と長女、次女。三池港の沖に無人島があるんですよ、争議のときはそこに船で行ってたから全然帰ってこないんですよ。

家族ぐるみでつきあうんですよ、三池では。わたしは火を起こすのが下手だったのですが、近所の人がご飯でもおかずでも持ってきてくれました。

伍賀：主婦会の役員とかしました？

律子：緑ヶ丘行ったときに役員してくれと言われて、子どもをおんぶしていきましたわ。主婦会の結成式のとき行きました。あのときどうしたんかな。

正子：わたしだけおぶって、お兄ちゃんたちは預けて。そしたらお兄ちゃんが泣いて泣いて大変やったって聞いたよ。

律子：ホッパーに座り込んでいる人たちにご飯を運ばないといけないから大変だった。

伍賀：オルグの人たちをおうちに泊めましたか？

律子：いえ、その人たちはホッパーに座り込んでいるから。

正子：その時にオルグに来てた人が大阪の同じ集合住宅に住んでたりしてね。あそこのＨさんは三池の闘争のときに来てくれはった人や、て聞きました。

三池争議の思い出については、「夫は争議に出かけたままほとんど帰ってこなかった」という答えが繰り返された。たびたび登場する「ホッパー」は貯炭槽のことである。有明海の海底から掘り出された石炭は港のホッパーに蓄えられ、貨車で出荷されていた。1960年の三池争議の折は出炭阻止のために労組がホッパーに座り込んでピケを張り、７月20日の１万人の警官隊と２万人の労組側が対峙する「ホッパー決戦」で有名になった。

争議の過程で分裂した組合の対立が熾烈であったといわれていることから、質問を向けてみた。

谷合：同じ社宅にいる人で第二組合に行った人はいますか。子どもが学校でいじめられたとか聞きましたが。

律子：そんなことはありませんよ。わたしは第二組合に行った人とすごく仲良かったんです。デモに行くときに正子を見ててくれた。この人を預けてデモに行ってたんですよ（笑）。

個人的には第二組合員とも仲が良かったという証言であるが、いっぽうで、以下のようなことも語られた。

律子：第二組合ていうたら憎しみでいっぱいなんですよ。主人をクビにしたんやと思うから、すごい憎しみがあるんですよ。今でも地域の自治会の会長が喧嘩して新しい自治会を作らはったんですよ、うちの近所の人たちが。その人たちが第二組合のような気がして仕方がない（笑）。

谷合：三池で闘ったことは一生思い出に残りますよね。

律子：そうですね。心の底に残ってますね、三池魂が。

正子：病院の院長に組合の機関紙を見せるなんてとんでもない、と今でも言うてます。

律子さんは結婚して看護婦の仕事を辞めていたが、大阪に移住後、病院勤めを再開している。正子さんの発言はそのころのことを指している。

谷合：解雇されてからは失業手当で生活されてたんですか。収入は？
正子：収入はないんですが、主人の家もわたしの家も百姓してるから、父が持ってきてくれたり、主人が取りに行ったり。昭和36年の５月ぐらいに大阪に来たんです。
谷合：再就職のために職安に行ったりの活動はされてましたか。
律子：オルグさんの世話とかそんなんばっかり。どこの総評でもいいから来なさいという話になったんです。たまたま大阪にわたしの弟がいるので、大阪にしました。

これについて、正子さんは以下のように証言している。

正子：聞いた話では、総評の太田薫が「大阪へ行け」と言うたとか。「三池［労組の活動家］だからオルグをしなさい」という。
谷合：一般の企業に就職するという気はハナからない、と。
正子：うちのお父さんに関してはね。一般の人たちはそうではない。労務管理の仕事をしてはる人もいた。Kさんとか。
律子：Kさんはどちらかといえば会社側の人やからね。いつになったら第二組合に行くやろか、いつ行くやろか、とみんなで監視してた（笑）。
正子：第二組合に行ったら非国民扱い（笑）。

三池労組の離職者で大阪地評のオルグに採用されたのは宮崎氏ともう一人、

西川米生氏（故人）である。大阪への移住過程について尋ねたところ、下記のように、西川一家と一緒に引っ越してきたとのことである。

律子：西川さんと一緒に住道（すみのどう）の松下［電器産業］の社宅みたいなところに居ました。一部屋ずつが広いんです。西川さん一家と向かいどうしで。あそこも男の子と女の子と二人。その年の12月に住道から雇用促進事業団のアパートのある西淀川[24] に移りました。２棟あって、顔見知りの人がいはった。三池から移って来た人がいました。ほかの炭鉱からの人もいて、ほとんど九州の人みたいで。

正子：そのころの記憶はほとんどないんですが、「おまわりさんは敵や」みたいな刷り込みがありました。地域巡回のお巡りさんが来ているのを見て、「お父さん、後ろからポリ公が来てるから気をつけや！」と言うたという（笑）。どこいっても周りの人にそれを言われるから、自分の記憶というよりは後から刷り込まれた（笑）。

律子：２年ぐらい西淀川にいて、府営住宅ができたというので高槻に移りました。そのときに山本さんも西川さんも一緒だった。

山本さんというのは山本幸三郎氏（故人）のことで、宮崎・西川両氏のあとから総評大阪地評の書記局員として雇用された。伍賀偕子さんによると、主に自動車の運転や労働者福祉の分野で活躍した。

谷合：もともとの地元のつながりはもったまま暮らしていたのですね。

律子：西川さんは三川坑の人やけど。四山の人はいたかな。Ｓさんか。山本さんは三川。

谷合：炭鉱の人たちは団結心が強いといわれています。大阪でもそうでしたか。

24）前掲『総評地方オルグ団名簿』に西川、宮崎両氏の名前があり、住所はともに大阪市西淀川区大和田町西２丁目の雇用促進事業団アパートとなっている。

律子：炭鉱から来た人とはお付き合いがずっとありました。

谷合：わたしの知り合いはお母さんが子どもに炭鉱出身者であることを口止めしたのですが、そういう目で見られているという思いはありましたか。

律子：そんなことはありません。三池出身の人は建設関係のひとやら多いし、そんなことは全然なかったです。

正子：わたしの父にとっては三池は誇りだったし。だけど、おじもおばも大阪で就職しているけど、その当時は興信所を使って調べられました。最後のところで落とされる。お宅の義理のお兄さんは総評にいてはるでしょ、といわれて就職できない。だからお父さんの息のかかっているところでしか就職できない。バリバリ組合活動されたら困るから。身分的な差別というより思想差別だったと思います。兄は全金関係の製作所。組合の強いところで就職しています。

全金は全国金属労働組合の略称であり、当時、総評傘下の戦闘的な組合として勇名を馳せていた。正子さんの姉が就職したＭ製作所も全金大阪地方本部の支部があり、労組の影響力が強い職場として有名だった。大阪では中小の金属機械関係工場で全金の組合が結成されていた[25)]。

谷合：律子さんは大阪で看護婦の仕事を再開されましたか。

律子：市役所の「キンちゃん」と呼んでいたひとの世話で、天王寺動物園近くの大学病院に勤めました。キンちゃんは市役所の労働運動をしていた。パートで１日４時間働きました。

伍賀：大阪総評の専従で子ども３人なんか絶対に育てられれへんよ、給料安いから。

25）大阪社会労働運動史編集委員会編『大阪社会労働運動史』第４巻（大阪社会運動協会、1991年）、全金大阪地本40年史編集委員会編『全金大阪地本四〇年史』（総評全国金属労働組合大阪地方本部、1989年）など参照。

正子：お父さんの給料のほうがお母さんより安かった（笑）。

律子：お父さんは給料10万円しかくれへんかったんです。

谷合：正規職になられたのはいつですか。

律子：K病院に移ってからです。味の素に2年ぐらい勤めたんです。進物係で、箱の中に油とかを詰める仕事。

谷合：もったいないですね。

正子：看護婦は夜勤があるから、子どもが小さいうちはそんな仕事を。

谷合：K病院も労組のつてですか。

律子：違います。

正子さんは高校卒業後、父のつてで大阪労働金庫（現・近畿労働金庫）に就職した。就職すると、父の偉大さをさまざまな人から聞かされたという。2011年に辞めるまでずっと労働金庫で勤務していた。

正子：労金に行ったら「あんたすごいね、お父さん」と言われた。メーデーにも小さいころから連れて行かれた。

谷合：お父さんがふつうのサラリーマンと違うというのはわかっていましたか。

正子：友達のお父さんが市役所に勤めてて5時半に帰ってくるというのを聞いてびっくりしました。お父さんは夜中に帰ってくるもんやと思ってましたから。泊まってきてもいいからと言うてるのにタクシーで帰ってくる。

谷合：お父さんから三池の話を聞かされておられますか。

正子：集会によく連れて行かれたりしたから、三池の映像もしょっちゅう見ていました。上の二人は組合活動が好きではないです。父親がいつも遅くまで帰ってこない、ということがあるから。私は太融寺（たいゆうじ）[26]の保育所に預けられていて、お父さんがわたしを迎えに来るのを忘れた

26）太融寺は総評大阪地評のあった大阪市北区に位置する高野山真言宗の寺院である。太融寺のWeb公式サイトを見ると、現在では保育所は設置されていない。

こともあります（笑）。

私は労金に入ってすぐに労組婦人部の役員をしました。父には「仕事もろくにでけへんくせに役員なんか！」て叱られました。役員のなり手てって、ないんですよね。ピンポイントで一本釣りで。なるべく若いうちから役員を育てたいというものがあったみたい。

結婚して生活して子どもの面倒みてたら組合活動でけへんから、動ける若い子を。

谷合：お父さんには「役員なんかまだ早い」と？

正子：「仕事がいっちょまえになって、みんなが見渡せる段階になってから組合の役員になるのはいいけれど、なにもでけへん人間がああしてくれこうしてくれって、下からものを言うても誰も聞いてくれへんやろ」って。実際にはそういうことはなかったけどね。みんな自分がなりたくないのをなってくれた、という感じで対応してくれました。

谷合：バリバリしはった。

正子：いや、バリバリしてない（笑）。

谷合：ごきょうだいみな、近所に住んでいたのですか。

正子：はい。

伍賀：宮崎一家の絆は強いですね。

正子：親離れできてない（笑）。

父は三池を離れてもずっと組合費を払っていて、三池のことは誇りでした。「わしは組合員や」て言うてました。

谷合：三池のネットワークはありましたか。飲み会とか。

正子：ありました。２回ぐらいつれていかれた覚えが。阿具根登さん[27]が来るから、と三池の人ばかり集ったこともあります。来賓として阿具根さん

27）阿具根登（1912～ 2004年）は三池炭鉱労働組合初代組合長、大牟田市議会議員、日本社会党参議院議員を歴任。1953年初当選、1986年政界引退。自著に『道をもとめて：回想録』創広、1981年など。

が来るから、「花束を渡して」と言われました。会の集まりにはよく連れて行かれました。

谷合：そういうのをどう感じてましたか。

正子：お父さんてすごい人だよ、と言われて。

谷合：それは嬉しい？

正子：そうですね。労働界全体が下火でどうなっていくのか不安でしたから。

谷合：お父さんが夜遅くまで帰ってこないという状態をどう思ってましたか。

正子：まあねー。

伍賀：西川さんや山本さんはそんなに遅くなってないですよ。宮崎さんはオルグだから夜が遅い。西川さんもオルグだったけど、途中からデスクワークになった。西川さんや山本さんは宮崎さんみたいに三池のことを表に出して言うてなかったですね。

正子：わたし一人でご飯食べた記憶があります。誰も世話してくれなくて。

谷合：お兄さんとお姉さんは全金の強いところで就職されたけど、組合活動はされなかったのですか。

正子：組合は嫌いや、って。身体を壊して仕事は辞めました。姉はＭ製作所で知り合った人と結婚して、同時ぐらいに仕事も辞めました。

谷合：お父さんの心意気を継いだのは正子さんだけということ？

正子：まあ、そうです。

谷合：お父さんから教えられたこと、受け継いだことはありますか。

正子：なんでも父親のフィルターを通して教えられたことが自分の中にありました。70年万博のときに過激派が太陽の塔に登ったとき[28]、「あんなことして」と言ったら、父には「なんで彼があんなことをしたのか、その理由を考えなあかん」と言われました。

三里塚闘争とか集会に行きませんか、と言われたら行きましたよ。２，

28）1970年４月26日～５月３日、太陽の塔の右目部分に男が登り篭城した「アイジャック事件」のこと。

３回は行きました。「飛び出たまねだけはするな、危ないから」と父に言われましたが。

谷合：お父さんは亡くなるまで社会党員でしたか。最後は社民党ですかね。

正子：辻元清美には肩入れしていました。お葬式にも来てくれました。

谷合：みなさんが大阪に来られてからも次々と三池からくる人がいましたか。

律子：それはあんまり感じないですね。あとから来たというのはわからない。沖克太郎さん[29] とか三池にいてはる人とは今でも付き合いがあります。今でも年賀状のやりとりをしています。

正子：三池労組の大会の時は九州へ行ってたような気がします。閉山のときもたぶん行ってると思う。三池のつながりて今でもけっこうあります。お父さんは泥くさーい仕事してた人ですわ。炭鉱爆発事故[30] があったとき、辞めててよかったと思いました。

正子さんは、「父の心は常に三池にあった」と語っている。律子さんは、毎年新しい手帳を手に入れると、必ず「やがてくる日に」という三池争議の折に組合事務所に掲げられた有名な詩を書き写しているという。

やがてくる日に
歴史が正しく書かれる
やがてくる日に
私たちは正しい道を進んだといわれよう
私たちは正しく生きたといわれよう
私たちの肩は労働でよじれ
指は貧乏で節くれだっていたが
そのまなざしは

29）戦後最大の労働災害である1963年11月の「三池炭鉱三川鉱炭塵爆発事故」では、458人が死亡し839人がCO中毒患者になった。沖克太郎はCO中毒患者が会社を相手に損害賠償請求訴訟を起こした裁判の原告団長。第36期（1980年）三池労組組合長。

30）同上。

まっすぐで美しかったといわれよう
まっすぐに
美しい未来をゆるぎなく
みつめていたといわれよう
はたらくものの　その未来のために
正しく生きたといわれよう
日本のはたらく者が怒りにもえ
たくさんの血が
三池に流されたのだといわれよう[31)]

「下手な字で」と恥ずかしそうに笑いながら、律子さんは手帳をみせてくれた。「三池組合員の誇りなんですよね」と。

伍賀さんは「宮崎一家は三池一家や」と結んだ。

後日、伍賀さんからのインタビューによって補足したところによると、以下の通り。

1966年に総評大阪地評に入職した伍賀さんは、宮崎良勝氏と一緒に「エキスポ綜合労組」[32)]という、今でいう個人加盟ユニオンの組織化活動を担った。伍賀さんもオルグとして登録されており、宮崎氏とはよく一緒に組合組織化に取り組んだ。

また、大阪地評には宮崎氏の実妹が書記局員として総務部に就職した（当時

31）三池炭鉱労働組合編『みいけ20年』（労働旬報社、1967年）の巻頭グラビアページにも掲載された。鎌田慧『去るも地獄残るも地獄』文庫版 p.262によれば、作者は徳永瑞夫であるという。律子さんの手帳に書かれた詩は、何度も書き写すうちに細部に多少の異同が生じている。

32）エキスポ綜合労組については、高田節子「「私たちはなぜ“判乱”したか〔エキスポ総合労組〕（ポスト万博―総動員体制への告発）」『朝日ジャーナル』1970年10月18日号、および平垣美代司「エキスポ総合労組と万博問題」『労働経済旬報』788号、1970年５月を参照されたい。

の大阪地評の大会報告書でオルグとして宮崎良勝、総務にも宮崎という名前が確認できる)。総務にはもう一人、三池炭鉱からの離職者家族として女性が1名雇用された。

定年または大阪地評解散(1989年12月)まで大阪地評に勤めた宮崎、西川、山本の3人のうち、宮崎氏だけが三池労組出身であることを前面に押し出していた。また、1972年ごろ、日本から全ソ労評(全ソビエト労働組合中央評議会)と日本の総評との定期交流のためにソビエト連邦を訪問した際、宮崎氏は社会主義協会の向坂逸郎の紹介文を持参してソビエト側労組に見せたところ、特別車に乗せてもらえたことが印象に残っている。

大阪地評の事務所にはCO中毒患者支援のための「小城(おぎ)羊羹」が常備されていた。小城羊羹を大牟田の三池労組から購入し、大阪各地の労組事務所に配送する役目を負っていたのが山本氏であった。小城羊羹は三池労組支援の象徴として印象深い(以上、伍賀氏談)。

これらのインタビューから浮かび上がる「元三池労組闘士」の姿は、一種独特の光を放っている。三池争議で馘首された離職者は組合活動家であったがために、再就職は困難であった。炭鉱離職者にいわゆる「黒手帳」が発給され、手厚い保護を受けられるようになるのは1962年以降である。三池争議以前または争議で解雇された者たちにはその恩恵は与えられなかった。

1200名あまりがその後どのように転職していったのか、追跡調査の存在については確認できなかったが[33]、三池炭鉱出身者であることを隠して生きると決め

33) 1966年に戸木田嘉久と川端久夫らが行った「関西地方在住の炭鉱離職者の就労と生活状態に関する調査報告」では次のように述べている。

遠隔地に流出した炭鉱失業者は「大多数が失対事業と生活保護にたよっている産炭地滞留者に比べれば、がいして炭鉱失業者のなかの相対的に恵まれた部分、現役労働者としての再生コースを歩んでいる部分として特徴づけられよう」(『立命館経済学』第19巻5号、1970年12月、p.73)

この調査はかなり詳しく離職者の再就職先について調査しているのだが、三池争議によ

た人もいる一方で、宮崎良勝氏のように三池を誇りとし、ことあるごとに三池を語り続けた人もいる。大阪総評のオルグという職に就いたからこそ、三池労組出身であることを隠す必要もなかったといえる。三池時代に培った思想と運動は宮崎氏の生涯変わらぬ宝であったのだろう。

三池のDNAは娘である正子さんに受け継がれた。末っ子だったからか、ことのほかお父さん子であった様子はほほえましい。おそらく宮崎氏は意識して娘を三池の集まりに同行したのであろう。父から娘に語り継がれた三池労組の闘いは、ものごとの考え方の根本すなわち社会問題への視座を正子さんに伝えるという役目を果たした。

鎌田慧『去るも地獄残るも地獄』には争議から20年後の三池労組員たちの苦悩と生き様が描かれており、そこには三池闘争という日本の労働運動史上最大の争議を闘った者の矜持と同時に、自省や悔悟の念もまた色濃い。しかし昔の仲間が集れば最後は「炭掘る仲間」を歌って涙にくれるという話は太田薫『わが三池闘争記』にもあるとおりだ。炭鉱という特殊な労働現場で培われた団結力、炭鉱の文化は消えることはなかった。宮崎律子さんと正子さんのお話を聞きながらそのことを強く印象付けられた[34)]。

さらに三池のDNAは、宮崎氏がその結成に貢献した「大阪北摂労災職業病対策会議」によっても受け継がれた。1963年の三川鉱炭塵爆発事故の後、宮崎氏は「大阪北摂三池CO患者を守る会」の組織化にも尽力し、三池労組との連携を保ち続けた。中原一氏もインタビューで「宮崎さんは面倒見のいい人だった。北摂にCO守る会があった」と述懐している。これらの組織の運動と歴史については本稿（２）に記述予定である。

って解雇された人々がその中に含まれているかどうかは判然としない。

34）炭鉱労働者の特質については市原博著『炭鉱の労働社会史―日本の伝統的労働・社会秩序と管理』多賀出版、1997年、を参照。

5　今後の研究課題

残された課題について述べる。いうまでもなく、事例を重ねていくこと、また第二組合関係者へのインタビューを行うことがまず挙げられる。

さらに、三池炭鉱のみならず、筑豊炭田など、九州各地の炭鉱からの移住者についても追跡調査の必要がある。九州からの離職者が転職を重ねるうちに日雇い労働者として釜ガ埼のドヤ街の住人になっていく物語を追うのは、次の課題である。

３点目に、炭鉱離職者のなかには炭鉱労働者だけではなく、他産業の人々も存在していることを忘れてはならない。大量の失業者が生まれた結果、他所へ移住した人々は炭鉱労働者だけではない。その中には店を閉めた商店の人々や、生徒数が激減した学校の教員、といった人々も含まれている。彼らのネットワークや、関西でのその後の生活と労働についてもインタビューを含めた調査を続けていきたい。